

蘭越町戦没者追悼式

～とわの平和を～



戦争により亡くなられた方々のご冥福を祈り、恒久平和を願う「平成23年度蘭越町戦没者追悼式」が8月7日午前10時から、ご遺族、来賓など約120人が参列し、蘭越町山村開発センターでしめやかに執り行われました。

追悼式は、参加者全員で黙祷を捧げ、宮谷内町長は「先の大戦が終わり66年の歳月が過ぎ去りましたが、再び故郷の土を踏むことなく殉ぜられた方々の御霊が永久に安らかならんことを最愛の肉親を失われたご遺族の皆様とお祈り申し上げます」と式辞を述べ、鈴木町議会議長、神後志総合振興局長、福村蘭越町遺族会長らが追悼の言葉を送りました。続いて、参加者全員による献花が行われ、ご遺族、来賓をはじめ、幼稚園、保育所、小学校、中学校、高校の児童生徒も献花台に花を手向け、先の大戦で亡くなられたすべての御霊に対し哀悼の誠を捧げました。



終戦の記憶

終戦の日を迎えた蘭越町の当時の様子が、旧蘭越町史に掲載されていますので、抜粋して掲載します。

昭和20年8月15日、この日、南尻別村婦人奉公隊は、敵機襲来の合間をぬって、早朝から蘭越国民学校の校庭に集まった。月1回の総合訓練日である。はち巻ぎにモンペ姿の隊員は、まず小林村長の訓辞、川島参与の激励の言葉を受けて、戦争完勝の決意を新たにし、引きつづき猛訓練をして11時すぎに解散、それぞれ帰路についたのであるが、そのころ、ラジオは「正午を期して、重大放送がある」ことを繰り返していた。人々は、いよいよ本土決戦が近づいたものと、おも苦しい気持ちでその時刻を待ったが、それは、思いもかけぬ、陛下自らの終戦大詔の放送であった。それを聞いて、敗戦という、きびしい現実に向面した村民は、急に、はりつめていた気がぬけて、茫然自失、それ以来、いろいろのうわさがうわさを生んで、仕事に身がはいらず、まったくおちつきのない毎日を過ごした。

(旧蘭越町史313ページから)

